

【十五夜(中秋の名月)】



日本人ほど月を愛でる民族は、

ほかにはないのではないのでしょうか。

アジア圏では、中秋の名月を祝う風習がありますが、満月以外の月を眺めて楽しむという話は聞きません。日本では、十五夜以外に十三夜の月見もするほか、中秋の名月後も、十六夜、立待、居待、臥待：とずっと月の出を待ちます。

昔の人は月の満ち欠けに神秘的なものを感じ、そこに生命の蘇りを見ていたのでしょうか。

三日月、十六夜、十七夜、十九夜、二十一夜、二十六夜(有明の月)などの月待ちがありますが、特に二十三夜待は盛んで、単に三夜待ち・三夜供養とも称し、斎戒沐浴して、経を唱えたり飲食したりしながら月の出を待ち、安産、病氣平癒などを祈願しました。月待ちの「待」は本来、神を「祭る」意味で、神式の場合は月読尊、仏式の場合は勢至菩薩の掛軸を床の間にかけてさうです。

今年の十五夜(中秋の名月)は、九月二十四日です。お月見には、すすきなどの秋の七草を飾り、お団子と里芋、栗やブドウなど季節の実りをお供えます。特に里芋は、お米が伝わる前から食べられてきた大事な作物です。この時期に収穫されることから、芋名月という言葉も生まれました。「秋の七草」は、奈良時代の歌人、山上憶良が万葉集に選定しています。

秋の野に 咲きたる花を 指折り(およびをり)かき数ふれば 七種(ななくさ)の花

萩の花 尾花葛花 撫子の花
女郎花 また藤袴 朝貌(あさがお)の花

(※「朝顔」でなく「桔梗」であるとの説が定説)

お月見というチャンスに、先人の思いや願いに心めぐらせ、美しい月の姿と、自分の心とを合わせてみれるようになってほしいですね。

秋のすすきや、鈴虫などの虫の声にも目を向け、日本人のきめこまやかな感性を呼び覚ましたいものですね。

明治天皇 御製

秋の夜の月にむかひて いのるかな

国の光のまさりゆく世を

(この月の光のように国の光が隅々までいきわたる世でありますように)

さまざまの虫の声にもしられけり
生きとしけるもののおもひは

(生命あるものは、みなそれぞれに胸に抱くひたすらな思いがあつて懸命に生きていることに気づかされる。さまざまの虫の声に耳を傾けると。)

【秋分の日・彼岸の中日・秋季皇霊祭】九月二十三日

春分、秋分の日は、昼と夜の長さがほぼ同じになるので、中日と言ひ、仏教では前後三日ずつ、計七日間を彼岸と言ひます。

彼岸とは仏教語で、生死の世界を彼岸とし、涅槃(不生不滅の真澄)の世界を彼岸とし、菩薩真澄の境涯に住するものを舟とし、この身に乘つて、此の岸

から彼の岸にいたらしむる日とされました。元来仏教から来たことなのに、彼岸の行事は、あつてインドにも中国にもありません。

中日(秋分の日)には太陽が真東から出て真西に入るといふので、この日、仏道に精進すれば西方浄土極楽へ往けるといふ説です。そこで寺詣り、お墓参りをして先祖を偲びます。中日には、草餅、牡丹餅、いなりずし、彼岸団子などをこしらえたり、お供えしたりします。私達の命の根であるご先祖の方々に感謝し、家族皆で手を合わせることは、先祖から受け継がれてきた大切な慣わしです。祖霊(みたま)をまつる慣わしは、古い日本の信仰と仏教思想がむすびついたものです。これと同じ意味の大きなお祭りが皇室でも代々行われています。



もともと皇室の祭祀は古く、仏式をもつてされていましたが、明治初年に神仏分離が強行され、毎年、御歴代天皇をその御命日ごとに祭つておられました。しかし、百二十一代という御歴代天皇を仮に平均して祭ることができたとしても月十回という大変なことになり、そのため、明治十一年に、毎年春秋彼岸の二季に盛大に皇霊をお祭りされるようお定めになりました。(皇霊祭)

この民間の彼岸の先祖供養の慣行を神仏云々にこだわることなく、宮中祭の骨幹に組み込まれたことは、祖先祭祀における君民一体の事実として、心あたたまる尊さを感じます。

また、同じ日、宮中の神殿において、皇室・国家・国民の守護神である天神地祇・八百万の神の神恩に感謝し、皇室と国民の幸福と繁栄を祈願される神殿祭が行なわれます。

神殿祭と皇霊祭を同日に行うべく定められたことも、敬神と崇祖が一体不離なる国風として重要な意義をもつものです。



Y・R



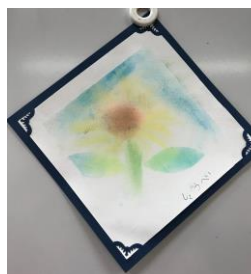
Y・M



Y・S



Y・K



K・S



Y・T



Y・H



M・S



T・Y



Y・Y



Y・H



Y・T



H・A



H・H

どれも、美しく、感動しますね！ 世界にたった一つの芸術作品です！
それぞれに味わいがあり、一人一人の個性が輝いていますね！
(夏休みオープン寺子屋で描いたパステルアート「ひまわり」)

〜声に出して言霊のひびきを味わおう〜

今月の万葉集

万葉集 巻一・二

第三十四代 舒明天皇 御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ

天の香具山 登り立ち 国見をすれば

国原は 煙立ち立つ

海原は かまめ立ち立つ うまし国ぞ

あきつ島 大和の国は

(訳文) 大和の国には、たくさんやまとの山々があるが、
一点非ひのうちどころのない、まことに円満具足えんまんぐそく
な天の香具山に上って、国見をするために見は
るかすと、国原にはここかしこに炊煙があまた
立ちのぼり、埴安池はにやすのいけや磐余池いわのいけや耳成池みみなしのいけの水面
には、鷗がしきりに飛び立ち飛び交っている。
なんとあきつしまという美しい平和な、れいれいみやうみやう霊々妙々な国なの
であろう。この秋津島、大和の国は。

次回は、十月二十七日(土)、六階 和室です。

十二時までです。

(文責・藤波)